

# 虚偽=偽装=粉飾=未必の故意から脱皮。ディスクローズ経営へ

子供の頃、友達と約束するときに「指切り」の儀式を誰かが経験したことでしょう。幼子の小さな小指と小指を絡ませ「ゆびきりげんまん...うそついたら...はりせんぼんの...」と、お互いが約束したことを破らないように契りを結ぶ。微笑ましい光景でした。小指といえ「小指と小指からませて、あなたと見ていた星の夜...」と信じ合って至福の男女カップルの様子もイメージできる。また江戸・宝永時代の頃から云われている「断指」の儀式なども小指です。

約束ごとと小指とは切っても切れない意味があるようです。

報道されている建築設計士による偽装設計問題は、設計士業界に止まらず「土」の付く業務にたずさわる多くの「土業」の人々に向けた国民の不信感を煽る結果となった。「土業」におけるルールをきちんと守って仕事をしている人にとって甚だ迷惑なことだが、土業に携わる者として欠いてはならない「約束事」や「倫理観」を忘れ、目先の営利を迫って仕事をしていた「土」にとっては大きな戒めとなったことだと思います。

また、ITの寵児として騒がれていた新興IT産業が「証券取引法違反」の容

疑で逮捕されましたが、その主たる行為は「粉飾決算」をしていたことが問題となった訳です。「この会社に働く社員にとつては、この会社の本来あるべき姿の「実業」の成長を願って汗水流して働いていたことだと思えます。しかし、残念なことには経営者は汗水流して「実業」に専念するどころか、「如何にしたら会社が大きく見えるか」という知恵を絞り出すことに価値観を追求した結果「虚業」とも云えるような経営に勢力を費やしてしまつたようです。

そのため、そこには偽計取引や偽計買収などの「偽りの種」をあちこちに蒔いた結果、それはそれは大きく輝くような？人も羨むほどの大輪の花を咲かせたのです。

しかし、「虚栄心」という名の水を与えて成長した「偽りの種」は、その文字の如く「中身がうつろい」「実質がともなわぬ」「空虚な花を咲かせていたのです。因みに、東洋医学の世界では、身体における「虚」とは「精気や血液がなくなつてうつろなさま」を云うようです。

## 小さな偽りの種が... 空虚な大輪の花と化す

# R. F. C

リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー

# Information & Report

2006.02.20 Vol.2006-02

【ちよと歳時記】

寒かつた今年の東京、公園の日陰に「ベンチ」の霜柱。そつと輝き起して如月の雨。ラスのようにキラキラ輝く。冷たく冷たい雨が降る。ひと雨ごとに寒さが緩んでくるのを頼に感じる頃、春一番がやってくる。花粉症で悩む人にとっては嫌な季節だ。

街を歩くと、和菓子屋の店先には「桜餅」や「雛あられ」の張り紙が目にする。小麦粉と白玉粉を練り薄く焼いた桃色の皮に餡を入れたものを塩漬にした桜の葉で包んで蒸した「桜もち」。しつとりした桜の葉がたまま口には、塩味とさっぱりした甘味の絶妙な味。仄かに鼻に抜ける桜の香りは正に早春の江戸の和菓子だ。女房の居る家では雛人形を飾り始めていたのだろうか。(細野)



◆**未必の故意が...  
似て非なる企業を生む**

これらの経営者は、安らぎを求めてやつの想いでマンションを購入した多くの

家族、また、日本で誕生したIT産業の寵児に世界に羽ばたけと応援していた多くの株主に対して、どの様に思っているのでしょうか。

経営者の自分本位の営利主義に支えられて「虚栄心」が生まれるのか、「虚栄心」が営利主義を生むのか私にはよく分かりません。しかし、そうした経営者のサクセス・ストーリーからみても、もともとは数億円、数十億円の資産を持つていたわけではなかったのですから、ある時を機にして、実質とは異なることを知りながらも敢えて虚偽を由とする方向に意識が変わり、制御が効かない自分勝手な営利主義が「虚栄心」を育ててしまうのかもしれない。

こうした経営者の事件を客観的に観るとき、國中無為(國中に偽りなし)と唱えていた「孟子」の「性善説」をもって考えるのが、人之性善、其善者偽也(人の性は善なり、其の善なる者偽也)と唱えた荀子の性悪説をもって考えるのか大いに悩むところです。

「未必の故意」とは、今ここで自分がしている行為が、このままだと将来大きな問題を引き起こすことが予見される、なおかつ自分が解決できる立場にあるのに積極的に対処しないという行為、またはそれに荷担する行為です。

最近の企業経営者の中にも、この「未必の故意」を罪悪感もなく行っている傾向があると思えます。新興のIT企業などは世界シェアを確保するためには、という大義名分を勝手に作り上げて「未必の故意」の経営に走っているし、中小零細企業の経営者にあつては、なんとか会社を存続させたいので、その為には少々然と行つていく。

だが、それは本来あるべき経営の姿ではないので、「未必の故意」によって経営してきた会社は、うわべだけは整っていても中身は似て非なるモノであることは云うまでもないことでしょう。

◆**結局は...  
清い中小企業経営者が生き残る!**

世界的に名の知れた●●●研究所の洗浄室のことです。様々な研究に使用された大量のガラス容器が毎日何回となく洗浄室に運ばれます。その時、山のようになり運ばれたいガラス容器に洗浄室のスタッフは何を考えたからその仕事をしていたのだと思えますか?

洗浄するという作業行為を「研究員が実験で使った汚れた物の後始末する：嫌な仕事」と考えたか、「研究員が良い実験が出来るように容器を予め洗浄しておく：大切な仕事」...と、二通りの考え方があって思いますが、当然、後者の考え方を貫き通して洗浄の仕事をしていたといえます。さすがに大きな成果を上げている研究所だと思えます。

「清」の文字を調べると「水が澄みとおるさま」「明らかにする」「整理する」「いさぎよい」「邪念がない」などの意味があります。古くからの日本の神事や様々な儀式を執り行う際には必ず「清い水」で清める行為から始まっています。

経営においても、ここぞという大切な局面となった時は、会社の本来あるべき姿が経営者のみならず支援してくれる周囲の人々にも詳らかに分かるようにすることが大切だといふことではないでしょうか。いざの時：経営危機に直面したら会社の財務体質や財務内容を整理し、隠し事を全て明らかにすることが何よりも大切であると云えるのです。

誠者天之道也(誠なる者は天の道也)と中庸が唱えているように、中小企業が生き残って行くには、些細な真実の行為を一つ一つ積み上げていくことこそが、多くの人々からの支持を得られる結果を生むと信じて止みません。



事務所近くに「カネノナルギ」(ベンケイソウ科・カゲツ)が咲き始めた。お金は成っていないせんけど...ぼったりとした肉厚の葉とピンクの星形の花がホッとさせてくれます。

# ●こら社長！ 少しは反省の言葉は出ないのか！

平成15年●月●日。

「大変なんです…。リスク・カウンセラーの出番です…！」  
親しくしていただいている会計事務所の先生から電話連絡があり、スケジュールを変更して急遽面会することになりました。

社歴15年。社長の年齢は自分と同世代。景気が悪く社員も減ったし…。売上げの低迷が続き、いよいよ月末の決済が出来ないのだという。

債権者は…親会社と下請け会社と金融機関。負債総額は約5億円。親会社が3億円。

下請け会社と金融機関が各1億円。金融機関からの借入の連帯保証人が気になった。永く取引していた取引先の社長であり友人としても親しくしていた人だという。保証債務は約7千万円になるという。その社長も保証人もそれぞれ自宅が担保に入っている。自分と同様に、その友人も破産するしかないだろう…と語る。

次の下請け会社に対する債務について聞いてみた。下請け業者は30社ほどある。中には2千万円を超える未払金がある下請け業者もあるようだ。ふと、この会社が倒産したらその下請け業者は一体どうなるのだろう…とそのXデーの時の状況が頭に浮かんできた。

「創立当初から取引してきたし、十分儲けさせてきたんだし…仕方ない…」

社長はあっさり躊躇いもなく言い放った。

確かに…私も社長たちにそのように云ったこともありましたが、それは、その社長が下請けや外注に迷惑を掛けるから…と悩み、なかなか決断できない社長に対して決断を促すときの言葉で…。今から債権者に迷惑を掛けようとしている社長が自ら口にする言葉ではないと思うのです。…いま社長が云う言葉じゃ～ぁないと思うけど…。

相談者が、私と会うまでに何人かの弁護士に相談してきた…というケースはよくあることですが、その社長もそうでした。相談した弁護士から

「とにかく…破産するにはお金が必要になるからのだから、とりあえず手元の現金は別にしておいた方が良い…」と云われたので…

「500万円ぐらいは別にしてある…」  
ということでした。

自己破産の申立てを委任する弁護士費用と裁判所に納付する予納金が必要になることは確かなのだが…何も…社員が同席している場でしゃ～しゃ～と云う言葉ではないと思って…私も少しムッとしてしまいました。

社員のこと気がなったので…給料や解雇予告手当は支払えるのかと尋ねてみました。もう会社には殆ど現金がなく…売掛金が入金したら、外注費と社員の給料に充当して残りはゼロになってしまうとのことでした。やっぱり、解雇予告手当のことまで考えていないのか…。

社員が失業保険に加入しているのかどうか気がなったので確認すると、どうやらそれは大丈夫なようだったが、経理担当の社員とはいえ、こういった話は社員の前で話すべきことではないので、それ以上のことは云うのを止めてしまいました。

しかし…

「社長もずいぶん無神経ですね…」

と、私も思わず声に出してしまいました。

「社員の方も同席していらっしゃるのだし…、社長と社員は利益相反と云って債務者と債権者の立場にある訳ですから…これ以上深い話はし難い…」…。そんな雰囲気だったので、奥さんのことが気になってしまったのです。

「それより、出来るだけ早く奥さんと2人だけで私の事務

## リスク・カウンセラー奮闘記・21

所に来ていただけませんか…？」

「どうやらこの社長は、あれこれと友人などから聞きかじってきたことを参考にしながら密かに何かをやっている…と感じたからなのです。」

この調子では後になって「詐害行為」で問題が出てくるのではないだろうか…。何処かの法律相談所で出会った弁護士が、基準報酬(目安)の半分で破産申立ての手続を依頼できるとのことらしいが…、こうした短絡的で思慮の浅い人には…それ以上あまり立ち入った話はしたくなかった…と云うのが本音のところでした。

だが、そんな無神経で身勝手な社長が破産するという心配よりも、やはり、私としては家族のことが気になって仕方がない。

「不渡りを出した事実上倒産となる日と、弁護士に委任したその後のことがどの様に展開していくのかを、これからどの様にすすんで行くかを情報として家族が知っているだけでも精神的に混乱も少なく…絶対に大きな違いがあるはず…。だから、家族と一緒に事務所に来て欲しい…」

と、ゆっくりとそのことを説明したが…どうやら社長の耳には届いていないようでした。それより…驚いたことに「治まるまで家族を連れて何処かに行っていようか…」と云う調子。

「あ～あ…。社員の前でそんなこと云うなよ～！。社長…少しは反省しろよ～！」と声を大にして云いたかったが…この人には云ってみても無駄なこと…と言葉を吞んでいました。

## ●未必の故意と再起できる社長像は…！

頑張ってきたけど…それでも倒産するのはやむを得ないこととして、再起できる社長は何かが違うのだと思うのです。この社長も、2年前にやめおけば良かった…と云っていたが、ズルズルと引きずったために債務は膨らんでしまったようでした。

再起できる社長は「見切り千両」がすばらしい。ダメだと理解できたら躊躇なく即決できる決断力がある。それに、社長は腹をくくって覚悟を決められる潔さがあり、「虚栄心」を捨てて債権者などにも誠意を持って対応しています。

倒産したのは、景気でもなく、市場変化でもなく、社員でもなく、自分自信の責任だと感じて行動するから…なんと云っても信頼感大きい。

特に、積極的に他人の意見を聴く謙虚さと、相手が部下であって下げるべきところで頭を下げられる自省心と社員への愛情が感じられる人だと思います。

経営者は会社のことを一番分かっていたはずですが、「未必の故意」と知りつつ経営してきた結果であることをしっかり反省できた人には、再起への応援を惜しまずしていききたいと思うのです。



早朝の公園を散歩して2cm位も土を押し上げた霜柱を手袋で搦ってみる。クリスタルの輝きが指のすき間から落ちる音を楽しむ。事務所入り口に作った箱庭を楽しめるのも、もうしばらくかな…。

